
ironist

稲垣優

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ironist

【Nコード】

N8635M

【作者名】

稲垣優

【あらすじ】

両親をマフィアに持ちながら、日本で暮らしていた女の子。その子は酷く可愛そうで、そして故意ではなく、いつでも自然と皮肉を言ってしまう、そんなとても痛ましい子。そんな子が、マフィアになり、スパイになり、後戻りできない人生を自ら歩んでしまう。そんなお話。

皮肉を歩む女

ゆらり、ゆらりと揺れるような人生だった。

まるで陽炎のように不規則に揺れ、しかし、暑いとも寒いとも思わないまま、私の十年は過ぎていったような気がする。熱くも無く、冷たくも無く、私の心は揺れ動く。

感じる暇が無かったのだ。感じるゆとりが、全くなかったのだ。

そんな私の大きな感情の揺れは、記憶する限り、たった一度きりだった。

まるで衝撃のような、怒涛の悲しみ。このまま壊れてしまうのでは、と私は思った。いいや、壊れてしまえば、楽になれると思っていたのだ。それほどの悲しみが、私の体から溢れ出るほど、湧き上がる。

愛しい愛しい、あの人の亡骸と真紅を抱きしめながら。

そこに行き着くまでの、私の人生を語ろう。

美しい言葉を使って、飾り立てる必要は無い。ただ、事実を述べていくだけでよいのだ。私が思ったことも含め、ただ書き連ねて行くだけでよいのだ。

悲しみも、苦しみも、嬉しいと思うことさえ無かった。

辛いことも。

楽しいことも。

何も無いまま、私の心は揺れ動く。

ゆらり、ゆらりと。

ただ泣くような、揺れるだけの人生に、
少しだけ付き合ってもらいたい。

皮肉を言う女

最大発射数は六発だけの、古い型の銃をホルダーに収める。やつと手に馴染み始めた、大きくて重い、実用には到底向いてない銃だった。我が主から手渡された、装飾の激しいアンティークのような銃。人を撃つたり、戦闘に使ったり、そういう面で使用するには不便この上ないずしりと重たい銃だが、私はこれを気に入っていた。それはもちろん、だれそれから貰ったからとか、そういう理由では、絶対に無い。絶対に。ただたんに、アンティークの物が、昔から好きなだけ。それ以外の理由は、決して存在していないのだ。

まだ今日は何もしていないのに、ただ歩くだけで疲労が足を突き刺すような気がしていた。柔らかな絨毯をブーツで踏みつけるたび、寝不足の体が悲鳴をあげる。まるで体重が倍になったようだ。原因は、わかりきっている。

この相棒のアンティーク銃が、重たすぎるんだ。

そういえば。彼らはどうしているのだろうかと思ひ出す。綺麗な銀髪の少年。運動神経がずば抜けていた野球部の元エース。学校のアイドルにその兄、最強であり最恐だった風紀委員長。沢田家に住み着いていた子供たちに、緑中に在学していた少女、それから……。あげていけばきりが無い。“彼ら”だ。沢田綱吉と、その仲間であり友達の、“彼ら”。

彼らは自分達の大空の為に、なにか手を打つのだろうか。打ったのだろうか。やめてくれと、懇願したのだろうか。これからするのだろうか。はたして彼らは、大空を無くしてなお、昔のように笑うことができるのだろうか？

私もかつては、その輪の中にいた。私は沢田綱吉の近所に住んでいて、小学校に入る前から一緒に遊んでいた。中学に入ったあたりだろうか、彼の友達は増え、それと同時に私の世界も広がっていった。どうやらその時、ツッ君たちはマフィアの世界に巻き込まれていたらしいのだが、当時の私はそんなこと知る由も無く、三年生に上がってすぐ、私の方から打ちあけた。私の両親ってマフィアなんだよね、と。

その時のツッ君の驚いた顔と声は、なんとなくだが今でも覚えている。真っ青になって、嘘だろと言っていたような気がするのだけど、なにぶん昔のことなので、正確な記憶ではない。そして、その場で全ての話を聞いた。

ツッ君がボンゴレファミリーという凄く大きなファミリーの十代目なのということ。獄寺くんや山本くんはその守護者で、いわゆる幹部なのということ。その他にも、私は正しいマフィアの知識や、両親のファミリーのことについても教えてもらった。

ジッリョネロファミリーと言って、ボンゴレと同等の歴史を持つマフィアなのだとリボーンは言っていた。

「ボンゴレは、数多くあるマフィアの中で頂点に立つほどの大きなファミリーだ。格式、歴史、総戦力、傘下の数。どれも他のファミリーと比べると、格が違いすぎる。が、ジッリョネロは、そのボンゴレに並ぶ歴史を持つ、由緒正しいマフィアだ。両親共にそのファミリーの人間ってのは、すごいことなんだ。誇っていいぞ、椎菜」

私は祖父母に預けられていて、両親には写真でしか会ったことがない。その上、なぜだか祖父母は両親のことを嫌っていて、ろくに二人の話もしてくれなかった。

なのに、私はその時素直に両親のことを誇りに思えた。素晴らしい両親を持って、私は幸せなのだろうと。そう思えたのはきつと、隣にドン・ボンゴレが居たからなのだろう。

そういえば。話は飛ぶ。その頃だったか記憶は定かではないが、ツツ君は京子ちゃんのことを好きだった。京子ちゃんはそれに全く気付いていなかったが、それでも、ツツ君に好意を持っていたのは確か。結局、どんな関係なのか分からぬまま高校生になり、私はイタリアへ飛び立った。

なんのツテも無いままジツリヨネロのアジトへ乗り込み、両親に会おうとした。が、すぐにその場に居た黒服の男につかまり、殺されたのを覚えている。まだまだ、裏の世界について無知だったのだ。その時殺されなかった幸運は、今でも私の自慢話である。

そして、そのボスのアリアさんに助けられ、両親が数日前に死んでいたことを知った。落ち込む私をアリアさんが慰めてくれて、その彼女の服の袖が濡れていることを知り、私はこの人についていくことを心に決めたのだ。

そうして、私がそのファミリーに馴染んでいくうち、いつしか表立った抗争が出てきた頃には、既に何もかもが手遅れだった。当然、ただの下っ端と何も変わらない私がどうこうできる問題ではなく、私はただ力尽きていくアリアさんを見守ることしかできなかった。強く美しかったアリアさんも、病には勝つことができなかったのだ。

「アリアさん、話ってなんですか……？」

「シーナ……。私の遺言だと思って、よく聞いて」

「……………はい」

「私にはね、娘がいるの。ユニという名前よ。これからユニが居る場所を教えるから、今すぐあなたにユニを迎えに行ってほしいの」
「む、娘?! アリアさん、お子さんがいらっしやっただんですか？」

！

「ええ。正真正銘、私の子よ。それでね、私が死んだあと、ユ二にこのジッリヨネ口を任せたいと思ってる」

「……………そのユ二様は、今のジッリヨネ口を支えられるほどのお人なんでしょうか？ 失礼ですが、私にはアリアさんの代わりが務まる人がいるとは思えません」

「私の娘よ、信じなさい。……………それでね、シーナ。ユ二に会いに行く時、このおしゃぶりを持って行って欲しいの」

「おしゃぶりを？」

「ええ。……………あなたにしか、頼めないの。よろしくね」

そして、弱るアリアさんの頼みを聞くため、私は幻騎士と共にアジトを発ち、アリアさんから教えられた家へと向かった。

そこに居たユ二様は私よりも年下で、本当に彼女にジッリヨネ口を任せられるのだろうか、不安に思ってしまった。失礼にも。

けれど、それも杞憂に終わる。私が無言でおしゃぶりを彼女に渡すと、ユ二様は全てを悟ったような瞳で、私を母の下へ連れていってくださいとだけ言った。その瞳には確かに大空の炎が宿っているように見えて、確かに、アリアさんの面影があったのだ。

その夜アリアさんは亡くなった。ユ二様は、彼女の死に間に合うことができたのだ。

母親が亡くなってすぐだというのに、翌日の朝、ユ二様は笑っていた。その笑顔があまりにも完璧すぎて、私には痛々しくさえ思えた。袖が濡れているのも分かった。

それに気付いたすぐ後だった。負傷した太猿とγが戻って来て、恐らく一番アリアさんの近くに居たのではないかとγは、その笑顔が不愉快だとユ二様をたたき出そうとした。が、最後には彼女に片膝をつき、忠誠を誓っていた。それだけの魅力が、ユ二様には

あった。

階段を下りるYがどんな表情をしていたのかは分からない。でもきっと、私と同じような顔をしていたのだろう。

私も、彼と同じ気持ちだった。

*

「だめです、シーナ。危険すぎます」
「でも、ユニ。その役は絶対に必要だよ。そして、私が一番の適役でしょう」

「でも、シーナ、貴女が死んだら元も子もない」
「死なない確率は、私が一番高いの」

言い合って、三日が経っていた。その間、ずっと水掛け論の押し問答。どちらも譲らなかった。

一番年が近く、そして同じ女だったからなのか、私とユニは急激に仲が良くなり、主従の関係として、そして親しい友達として、近い存在になっていった。呼び方もすぐにユニ様からユニへと変化したし、γのあまり姫に馴れ馴れしくするなという声も、右から左へ、いつだって聞き流していた。

そして、そうなつてすぐだった。ジェツソファミリーの脅威は大きくなつていくばかりで、一つの問題が発生した。私たちは、相手のファミリーのことを何も知らなかったのだ。ビヤ克蘭の名前以外は。

「だからね、絶対に必要なの、スパイは」

「その意見も分からなくはないが、姫の気持ちも考えろ」

「考えてる。ユニは被害を出したくないの。だったら尚更、相手の情報が必要だと思わない？ 事前に相手が何をするのか知っていたら、対応策も練れるというものでしょ？」

「姫は、お前の身を案じているんだよ」

「私だって、ファミリーの未来を案じているの。堂々巡りでしかないの、私たちの言い合いは」

「シーナ、焦ってるな？ とりあえず名前は知ってるんだ、どうにでもなるだろう。ゆっくり待て」

「……………ええそうね、γ。貴方はユニのことは名前ぐらいしか知らないのに、全てを知っているつもりでいるのだね。きつと、貴方は名前だけで他人の本質を見抜くことができるでしょう？」

「シーナ……！」

「でもね、生憎と、私たちはそんな能力を持っていないの。情報が、必要なの、何よりも」

Yは、席を立てどこかへ行ってしまった。怒ったのか失望したのか、私に対してどう思ったのかは分からない。分かるのは、彼が私を説得するのを諦めてくれたと言う事だけ。

「お前の皮肉は嫌いだ、シーナ」

皮肉のつもりは無かったの。本当なのよ、Y。

そして、私がスパイの話題を出して四日目の朝、ユニは突然私のスパイの作戦を許可した。いくつかの条件は、出されたけれど。

「まず、シーナ、絶対に死なないで。情報の収集や秘密を守ることよりも、自分の命を優先して」

「分かった」

「次に、百蘭の命令は絶対に聞いて。例えそれがどんな命令だとしても」

「うん、分かった」

「シーナ、貴女はときどき、我慢が足りない。辛抱してね。どんなことがあると、スパイだと悟られてはいけない。耐えて、時を待つのよ」

分かってると、何度もユニに約束した。いつもの、何かを覚悟した目をしているユニの後ろに立つYは、突然意見を変えたユニを不審な目で見ていて、そして私には、死に行くようなものだと言った。

の眼差しを突きつけていた。

「y、そんな目で見ないでよ。さっきも約束していたでしょ？ 私
は自分の命を優先するって」

「そんなことになったら、うちのファミリーの旗色が悪くなるのは
目に見えてる。賢くないと言っているんだ」

「でも、ユニは許可してくれた。あの目は、何かを知っていて、そ
れから何かを覚悟をしている目だった」

「お前に姫の何が分かる」

「知ってるよ。少なくとも、貴方よりは」

「不愉快だ」

「それは良かった」

にこりと笑えば、彼の眉間の皺は深くなるばかりだった。私もそ
うなるだろうことは分かっている。この顔に笑みを浮かべるのだから、
ああ、意地が悪くなったものだ。

「シーナ、お前のことは気に入らないが、一応仲間だ。死んでほし
くないんだ」

「ええ?! まさかyからそんな言葉が出るとは思ってたかった!
どうしたの?」

「……………いいか、覚えておけよ、小娘。大切であればあるほど、
護るときには武器を握らなければならない。しかし、武器を持った
ままでは、大切な人間を抱きしめられないんだ。それを決して、忘
れるな」

彼の目は、ユニとはまた違った覚悟を持っているようだった。そ
の眼球には、確かに私の姿が映っているのに、彼は私を見てはいな
い。彼が見ているのは、今の大空であるユニ、そしてアリアさんだ
けなのだ。

彼は彼で、さまざまなものを背負っているのかもしれない。

「そう、ご忠告どーも。でも今のあなたは、武器をもっていないように見えるけど？　そうだね、アリアさんが死んでから、ずっと」

「……何が言いたい？」

「いいえ、別に。——ただ、武器を持たない手なのに、大切な人を抱きしめられない理由はなんなのだろう、と思ったただだよ」

その時のYの表情を、私は知らない。傷ついていたのか、怒っていたのか、悲しんでいたのか。興味はあったけれど、私は知るべきでないと思ったのだ。だって、原因は間違いなく私の悪意なんだ。

皮肉のつもりはなかったの。思ったことを言っただけなのよ。それであんなことを言ってしまうのだから、私は素で皮肉を作り出してしまふような、そんな嫌な人間なのだろう。私は、無意識に皮肉を作りだしてしまう、そんな天才なのだ。

「シーナ。お前のような皮肉の塊の人間は、死んでも文句言えねえさ、きつと」

搾り出したような声だった。

（それでも私は、アリアさんが愛してくれたこの“皮肉”を捨てることはできないんだよ、Y）

時を待てと、ユニは何度も繰り返してた。それは、私が百蘭の元に行くまで続いた。その時がいつなのか、聞かされることも訊ねることもなく。

私はまた、何も知らないまま大切な人間の下から飛び立ったのだ。

楽なものだった、ジェツソファミリーに潜入するのは。私は日本に居た時代、入江正一と知り合いだったし、たいして疑われることも無く、入江正一の助手としてファミリー入りできた。そして、スパイとしての役割を、きちんと果たしていたのだ。

ボスの名は百蘭。謎は多いが、慕う者多し。戦っている所を見たことは無いが、周りの反応からしてなかなか強いだろうと推測。それから、入江正一の話。ファミリーの大まかな人数、編成、重要人物、戦い方。それらを、不定期にジツリヨネ口へ報告。誰にもばれていない。私は完璧なはずだった。そう、私はどこも間違っていない。いなかったのだ。

恥ずかしながら、私はスパイとして活動しておきながら、幻騎士の行動を知らなかった。彼が百蘭を崇拜していることを知ったのは、ミルフィオーレが成立してからだ。彼がジツリヨネ口を裏切っていると知っていたなら、何が何でも、そうなる前に幻騎士を殺していたというのに。

ブルルルル、と携帯電話に耳を寄せ、今か今かと相手が電話に出

るのを待ちつつづける。焦っていた。冷静さは、確実に欠いていたといえるだろう。

「ユニ?! どういうことなの?! 百蘭との会談に出向くなんて……!!」

『シーナ、そこはどこ? アジトのなら、そんな大きな声で電話したりしてはダメよ』

「大丈夫、誰も居ないし絶対に来ない。それよりも、質問してるのは私だよ、ユニ。どういうことなの。無謀だよ、百蘭と話なんて! あいつと話なんて、できるわけない!」

『大丈夫よ。無謀なんかじゃないわ。シーナ、信じて』

「そりゃ……信じてる、けど……」

『忘れないで。シーナがスパイをするというときに、最初に出した条件。自分の命を最優先にすること。例えどんな命令でも百蘭に従うこと。それから、耐えること。今が一番大事なときのよ』

「ユニ……私は、貴女に死んでほしくない」

『シーナ。大丈夫よ、私を信じて。無謀なんかじゃないわ』

「……………それでも、やっぱり私、!」

『耐えて。シーナ、時を待って。まだその時じゃないわ』

誰かの足音が聞こえたので、仕方無しに電話は切る。もう、時間は無かった。掛け直すことは出来ない。ユニはただ、大丈夫だ無謀じゃない時を待て。それしか言ってくれなかった。ええ、信じているとも。あなたは私の大空だもの。あなた以外に信じるべきボスは存在しない。でも、けれど。だからこそ、あなたに死んでほしくない、ユニ。

私は心を落ち着かせてから、百蘭の部屋へと向かう。

「あ、シーナちゃん? 話は正ちゃんからよく聞くよ、優秀な助手だってね」

「勿体無いお言葉、ありがとうございます」

「それでね、明後日ジツリヨネ口のボスを迎え入れる話は知ってるでしょ？」

「はい」

「その場に、君に居てほしいんだ」

「……私に、ですか？ 失礼ですが、私程度の者がそんな大事な場に訪れるのは、些か……」

「シーナちゃんだからこそ、だよ。うちはね、やるべきことをやってくれば、幸せになれるんだよ」

「は……しかし」

「男にお茶を淹れてもらうより、女の子から淹れてもらった方が美味しいでしょ？ だからね、その時、相手側のボスのお茶にコレを入れてほしいんだ」

「これは……？」

「劇薬。詳しい名前は知らないほうがいいよ」

いつも見る顔でにつこりと笑っている百蘭。彼の手には薬らしき液体が握られている。劇薬だと言った。詳しい名前は知らないほうがいいと言った。どんな作用があるかも、決して教えてくれない。それがどれだけ危険な話なのか、いくら馬鹿な私の頭でも考えつくというものだ。

それを、ユニのお茶に入れる。どんなことが起こるのかも分からないまま。

（百蘭の命令は絶対に聞いて。例えばそれがどんな命令だとしても）

ユニ、こんな命令でも？ 絶対に聞かなくてはいけないの？

ユニは笑顔で頷くことだろう。きっと、全てを予知して言っていたのだ。

（今が一番大事なときなのよ）

そんなの知らない。分からないよ、ユニ。教えてくれなきゃ分からない。耐えろ、とあなたは言った。いつまで耐えればいい？ 時が来るまで？ いつ、何の時が来るのかあなたは教えてくれなかったじゃない。酷い。

ユニの好きだった紅茶に、透明な液体をたらす。それだけの仕事だった。

私は、その間、一度たりとも泣かなかった。

「気安く触るな」

激昂するY。それを止める仲間たち。彼の攻撃によって血を流しているユニ。飄々とした態度で、足取りで、奥へ戻っていく百蘭。何度も何度も、彼を殺そうとする手を、足を、ユニを言葉を思い出して必死に止めていた。

——耐えて。シーナ、時を待つて。まだその時じゃないわ。

いつになったらその時が来るのか、あなたは教えてくれなかったわ。

「シーナちゃん。うちはね、やることさえやってくれれば、幸せに

なれるの。きちんと嫌な仕事をしてくれたんだからね、スパイの件は水に流してあげる」

合併したのだ。いわれなくなつて、スパイなんて、ひつようない。

Yが叫ぶ、そして睨む。泣く私を、彼の一生懸命な言葉が責めてていた。何故姫を助けなかったのかと。お前はそうするためにそこに居るんじゃないのかと。

違う。

私はユニを殺した。劇薬を投与したのは、紛れも無く私なのだ。いつでも笑顔だったユニを消したのは、私。

ユニを殺したのは、私だ。

*

こういうとき、決まって思い出す光景がある。

アリアさんが亡くなったときも、ジェッソのスパイになった翌日も。

赤い夕陽を背負って、愛しい人は私に手を伸ばす。何度思い出し
ても、泣きたくなるほど胸が切なくなる光景だ。

ツッ君、あなたはいまだにいるの。

今、すぐくむしょうに、あいたいよ。

皮肉を称える女

赤く染まりつつある夕暮れの中。その人は、ぺたりと座り込んだまま動こうとしない私を困ったように見ている。響き渡るのは幼女の大きな泣き声。それを宥めるような声が、たまに聞こえたりもしていた。

その日、私ははしやぎすぎて。ツツ君を連れまわしたあげく、勝手に躓いて転んでしまった。当然のように私は盛大に泣き始めて、そんな私を見た彼は困ったように慰めていた。痛い痛いといつまでも泣き続け、空はゆっくりと赤みがさしていく。それに気づいたツツ君は帰ろうよと言い始める。暗くなる前に帰らないと、私たちは怒られてしまうことを、もうすでに知っていたのだ。

それでも私は動かない。泣き続けるばかりで、返事もしようとしなかった。困り果ててしまったツツ君は、今にも泣きそうな顔で、私を見ていた。

そして彼は、座り込んでいる私に手を差し伸べる。

「かえろうよ、椎菜ちゃん。いたいなら、ぼくがおんぶしてあげるから。かえろ？」

ツツ君は昔から平均より身長が低くて、力も弱くて、平均的だった私をおんぶするなんて、絶対に無理だというのは幼いながらもよく分かっていた。それは彼だって分かってはいるはずで、だから、そんなことを言わせてしまった自分を恥じた。

だから、頑張ろう、と思った。私は頑張れるのだと、その時なぜか実感したのだ。

アリアさんが亡くなったときも、ジェッソのスパイになった翌日

も、ユニを殺したその直後も、決まって思い出す光景がある。

その人は、背後に赤々とした夕日を背負って、私に手を差し伸べる。

その優しすぎる光景を思い出すたび、私は何度も泣きたくなくなるのだ。

沢田綱吉。私の幼馴染。親友であり家族のような存在であり、私の愛しい愛しい人。

私は彼に、もうずっと、恋をしているのだ。

*

そこは私の部屋だった。私しかいない外界とは遮断された空間。数時間かけて、私は電話番号を押していく。迷いならたくさんあるけれど、でも、どうしても彼の声が聞きたかった。

呼び出し音が三回。トルルル……トルルル……トルルル……。

『はい、もしもし？』

「……もしもし。ツッ君？」

電話越しに、彼の焦る様子が伝わってきた。ツッ君、なんて呼ばれたことに驚いたのかもしれない。誰か分からない相手に突然そんなあだ名で呼ばれたら、確かに吃驚もするだろう。

『誰……って、椎菜か?!』

「うん。そうだよ。久しぶり」

『うわー、ほんとに久しぶりだな。今まで連絡もしないで、何してたんだよ』

「ん、ちよつとね。ツッ君は元気？」

そんな、他愛もない話をして、私たちは会話を続ける。勘の良い彼は一体何を察したのか、突然消えた私の行方などは一切聞かないで、昔話と知り合いたちの様子などを話して聞かせてくれた。

獄寺くんがどうこう、山本がどうこう、昔一緒に遊んだ公園がどうこう、という話に耳を傾けている間、私はなんとも言えないふわふわとした幸福感に包まれていた。ああやっぱりこの人が好きだ、と実感したら、咄嗟に口が動いていた。

「ねえ、また電話してもいい？」

もちろんだろ、という軽快な声を聞いて、私は長い間忘れていた眠気を思い出した。その旨を伝え自然に電話を切れば、気分が大分上向いていることに気づく。

ああ、大丈夫だ。きっとどうにでもなる。ユ二も、Yも、白蘭のことも、諦めなければきっと良い方向に進んでいくだろう。

そんな風に思えて、ゆっくりと瞼を閉じる。安心感に包まれた暗闇の中、小さく囁く声が聞こえていないわけもない。（相手はボンゴレの十代目なのに仲良くしてもいいの？ いつか敵になるかもしれないのに？ そうなったら私はどうするの？）

けれどそんな声も、眠りに落ちる寸前のぼやけた意識は無視を決め込むことにしようだ。

*

その後も私たちの薄い関係は続く。ほとんどが私から電話をしていて、けれどたまに彼から電話をかけてくることもあった。それは決まって私が精神的に参っているときで、毎回そのあまりにも良すぎるタイミングに、どこかから見ているんじゃないかと疑ったものだ。ボンゴレの超直感ということで、納得はしたのだけだ。

会話の内容はいつも同じ。優しすぎる昔話。

彼と離れてから十年も経っていないはずなのに、遠い遠い昔のような気がする。体感にして百年ちよい。それほど昔の出来事のように感じられて、こうして話をしていることが嘘のような気がする。穏やかな今が、現実味を持ってくれない。

現実はいつでも酷いものばかりだから。

我々ミルフィオーレはボンゴレファミリーへ攻撃をしかける計画をたてている。そう聞いたのは私の直接の上司、入江正一からだ。嘘だと詰め寄ったような気もするし、そうかと納得をしたような気もする。正一から何も言われてないから、たぶん問題は起こしていないのだと思う。

でも、その衝撃は私から消えてくれない。あついに私はツツ君まで傷つけるのか、とふと思ったことも、忘れられそうになかった。それでも私たちは忙しさの合間を縫って連絡を取って、でも私は大事なことを告げられないまま、ことは大きくなっていった。

*

それは、Yたちの隊と一緒にいるときに起こった。

私は元ジツリヨネ口でありながら、スパイとして潜り込んでいたためジェッソ出身でもあり、白の制服を着ながらも意識は黒に近い。そんなあやふやな存在のため、もっぱらブラックとホワイトのクツション役として使われることが多かった。それはつまりどちらに属することもできていないということなのだけれども。

そして、アジトの外での仕事の際。起こるべくして起こった事態だと言えるだろう。ボンゴレの守護者の突然の奇襲。こちらの人数は白黒合わせ三十ほど。対してあちらは二人。そんな絶対的不利の奇襲作戦を彼らは実行し、結果飯の宿として借りていたホテルの一室にまで飛び込んできた。そこに待機していた私とは、思わぬ形で
の再会だ。

「椎菜……？！ お前、どうしてこんなところに?!」

ドン・ボンゴレの右腕と称される、嵐の守護者、獄寺隼人。当然、私の友人でもある人だ。その人の隣には山本武も居て、やっぱり驚愕の表情を並べていた。

そして私の昔の友人たちに負けなくらいの驚きを全身で表現しているのが、Y。どうやら彼とは昔からの付き合いだけに、ボンゴレとつながりがあることが不思議でならないらしい。

「や。久しぶり」

「おま………！ どういうことだっ！ なんでミルフィオーレの制服を……！」

そんなの答えは簡単だ。

「私が、ミルフィオーレの構成員だからだよ」

獄寺の視線は鋭くなる。どうやら私の言っていることを真実だと受け取り、敵だと判断したらしい。それとは反対に、山本は戸惑っている。私と獄寺をしきりに見比べている。

「椎奈！ ふせろ！」

突然のYの声。言われるがまま咄嗟に伏せたら、鼓膜が破れるのではと思うほどの轟音が聞こえた。ダイナマイトが炸裂した音。絶体絶命、そんな文字が頭をよぎった。

「椎奈、どこだ！」

Yが私の名を呼び、安否の確認をしようとしている。獄寺たちはどうなったのかと、頭をあげれば、そこはすでもぬけの殻だった。さっきの爆発に乗じて、逃げ出したみたいだ……多分。

私に怪我はなかった。どうして彼は匣でなく、旧い武器であるダイナマイトを使っていたのだろうか。不思議だったが、答えを知っているような気も、していた。

*

『知ってたよ』

開口一番、ツッ君はそう切り出した。何も言えない私に向かって。

そうか、知っていたのか。知っているはずがないと思う自分もいたけれど、でも彼なら知っていても可笑しくないと思う自分もいた。こんな状況なのにやけに冷静な自分が、笑えるほど可笑しかった。

「どうして？」

『椎奈が突然消えて、どこに行っただのかなんて、想像くらいつくよ。』

—— ミルフィオーレの成り立ちだって、知ってる。』

「ああ、そっか」

何も告げずに日本を発ち、それから連絡を一切していなかったが、私の居所など彼には筒抜けだったらしい。良く考えれば、それも普通のことかもしれないと、思ったけれど。

『詳しいことは聞かないけど、椎奈が辛い思いをしてるのは分かってるよ。だから、俺たちのことは気に病まなくても良いから』

何も言えない。言わなくてならないのに。

『だから椎奈、生きて』

咄嗟に電話を切った。ツー、ツー、と無機質な音が鳴る。それをしばらくの間聞いて、私は体が震えているのに気づいた。電話を握りしめる。感情のままに壊してしまいたかったけれど、できなかった。これだけが、私と彼を繋げてくれるものだった。

＊

白蘭に、また呼ばれた。単独の任務という話だ。

「これで、ボンゴレ十代目を撃ってほしいんだ」

これ、と言われ差し出されたのはアンティーク調の重そうな銃だった。どう見ても実用的でない。本当に撃てるのかどうか怪しいほどだ。

「どうしてですか？」

「ん？ 正チャンから詳しい作戦を聞いてない？ まあ、話は簡単だよ。僕とボンゴレで会談をするから、僕の後ろに控えていて、そこで彼を撃ってほしいんだ」

「どうして、私、なのですか？」

「椎奈チャンってさ、ボンゴレの人たちと、仲良かったらしいじゃない？」

「そんなのっ！」

「うん、わかってるよ？ 今は椎奈チャンはミルフィオーレの人間だよ。でも、君は前科があるから。簡単に信じることはできないかなあ」

「……それで、」

「そう、それで今回の命令だよ。君の幼馴染、殺して見せて？ したら、君を信じるからさ」

私は机の上に置かれている銃を手を取った。私の趣味をどうして知っているのかと尋ねたいくらい、綺麗な銃だった。私の趣味と真ん中の、銃。

「……はい」

それから私は、閉じこもった。誰にも会おうとせず、何も食さず、声も上げようとしなかった。死んだように生きて、ずっと『このまま死んだらどれだけ良いだろう』と考えていた。

そんな日が何日続いただろうか。入江正一が、私のことを訪ねてきた。

「椎奈！　しっかりしろ、何も食べてないらしいじゃないか！」

私は無言を返す。

「椎奈……。お願いだから、話を聞いてくれ。僕は、お前に食事を摂らせるためにここに來たわけじゃないんだ」

無反応。

「……………白蘭さんからの命令は聞いてるよ。それで、この弾を綱吉くんに撃ってほしいんだ。この弾は、撃たれた人間を仮死状態にする。椎奈、これで、白蘭さんを騙してほしいんだ」

やっぱり無反応。

「椎奈！　君が撃たなければ、沢田綱吉は死ぬんだ！　これで心臓を撃てば、彼は死なない。いずれ落ち着いたら、彼はまた今までの

ように生きようになる！ 椎奈！」

ぼんやりと見ていた、彼が手にしている弾を手にとった。普通の弾と変わらない。これを心臓に撃てば仮死状態になれるなんて、嘘みたいだ。

「……椎奈、お願いだ。君は、みんなの希望なんだよ。それで撃つてくれ。——だから、そのためにも、自分の命を捨てるような真似はしないで。椎奈」

そして、正一は出て行く。自分の言うべきことは言い切ったらしい。

私も彼が言いたいことはよく分かった。白蘭の右腕とでも言うべき彼が、どうしてボンゴレの命をこっそり生かそうとするのかは分からないけど、でも少しでも可能性があるならそれにすぐるべきだ。頭はそう冷静に計算する。

——私は彼を撃つのか。大好きで大好きで……昔からずっと、愛している、彼を。

この目で見て、この腕で狙い、この手で引き金を引くのか。

正一、貴方は私に彼を殺せと言うの？ 心臓は動いているのかもしれない。でも、わざわざ仮死状態にするということは、表向きは死んでいることにするということでしょう？ 彼が生きていることはいったいどれだけの人が知ることになるの？ 獄寺は？ 山本は？ 京子ちゃんは、ハルは、両親は……？

この全員が知るなんて、有り得ないじゃないか！ 彼らにとっては、愛すべき人の死は現実なのだ。憂いて自殺をする可能性だってあるじゃないか。

彼らにとっては、私は沢田綱吉を殺した人間に他ならないじゃない

いか！

白蘭に渡された銃に、入江正一から受け取った弾を入れ、沢田綱吉を生かすために心臓を狙う。

なんとという矛盾！ なんとという皮肉！
やはり私は、皮肉を引き寄せる女なのだ。

—— いろいろと言ってはみたけれど、でも答えなど分かりきっているのだ。

白蘭の命令に従うこと、即ちそれはユニの命令。私には、従わないという選択肢は、最初からないのだ。

*

最大発射数は六発だけの、古い型の銃をホルダーに収める。やつと手に馴染み始めた、大きくて重い、実用には到底向いてない銃だった。白蘭から手渡された、装飾の激しいアンティークのような銃人を撃つたり、戦闘に使ったり、そういう面で使用するには不便この上ないずしりと重たい銃だが、私はこれを気に入っていた。

それはもちろん、だれそれから貰ったからとか、そういう理由で

は、絶対に無い。絶対に。ただたんに、アンティークの物が、昔から好きなだけ。それ以外の理由は、決して存在していないのだ。

まだ今日は何もしていないのに、ただ歩くだけで疲労が足を突き刺すような気がしていた。柔らかな絨毯をブーツで踏みつけるたび、寝不足の体が悲鳴をあげる。まるで体重が倍になったようだ。原因は、わかりきっている。

この相棒のアンティーク銃が、重たすぎるんだ。

「やあ、逃げずにちゃんと来たんだね、椎奈ちゃん」

何も、見ないようにした。白蘭も、ツツ君も、自分の現実も何もかも。無心になって。考えない、考えない、考えない――

白蘭は、話も早々に私に撃つよう合図をしてきた。その段階になって、ようやく目を開ける。あるのは豪華な部屋と、白蘭と、ツツ君だけ。

両腕を上げ、彼の心臓を狙う。外すと言うことは頭に無かった。ジッリヨネロの頃もジェッソの頃もミルフィオーレの頃だって、私は射撃練習は怠らなかった。一般人では考えられない、それなりの腕だ。

狙う。狙う。あの心臓を止めるために。

すると、ツツ君は笑った。柔らかに、優しく、私の知っている笑顔で――

腕に衝撃が走る。撃ったのだ。

*

（両親共にそのファミリーの間でのは、すげーことなんだ。誇
つていいぞ、椎菜）

（……あなたにしか、頼めないの。よろしくね）

（お前の皮肉は嫌いだ、シーナ）

（百蘭の命令は絶対に聞いて。例えそれがどんな命令だとしても）
（シーナ。お前のような皮肉の塊の人間は、死んでも文句言えねえ
さ、きつと）

（耐えて。シーナ、時を待つて。まだその時じゃないわ）

（劇薬。詳しい名前は知らないほうがいいよ）

（はい、もしもし？）

（椎菜……?! お前、どうしてこんなところに?!）

（だから椎奈、生きて）

（君の幼馴染、殺して見せて?）

（君は、みんなの希望なんだよ。それで撃ってくれ。———だか
ら、そのためにも、自分の命を捨てるような真似はしないで）

（かえろつよ、椎菜ちゃん。いたいなら、ぼくがおんぶしてあげるから。かえろ？）

いろいろなことを——思い出す。けれど、私が最後に思い出したのは、何故かYの台詞だった。

（……………いいか、覚えておけよ、小娘。大切であればあるほど、護るときには武器を握らなければならない。しかし、武器を持ったままでは、大切な人間を抱きしめられないんだ。それを決して、忘れるな）

今の私は、どうだろう。

これ以上ないほど大切だったから、私はユニとツツ君を殺すしがなく、また、武器を持ったままでしか、彼を抱きしめることが出来ないのだ。

（素晴らしい皮肉だ、Y）

夕陽でない赤に染まったツツ君を抱きしめながら、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635m/>

ironist

2011年11月10日12時02分発行